

マクア人居住地における モザンビーク解放闘争の経験

その実態と言説の再検討

船田クラセンさやか

はじめに

1950年代末から60年代初頭、イギリスやフランスが植民地の独立を約束していくのとは対照的に、ヨーロッパの一弱小国にすぎないポルトガルはその広大な植民地を手放すどころか、逆に支配を強化させていた。一方のポルトガル領アフリカ植民地（カーボ・ヴェルデ、ギニア・ビサウ、アンゴラ、モザンビーク）の住民は、独立を達成しようとそれぞれ解放運動組織を立ち上げ始めた。そんななか、解放運動に理解を示す新興独立国および社会主義国が国連の過半数を占めるようになると、植民地堅持の姿勢を崩さないポルトガルに対する国際的な批判は無視し得ぬほど強いものとなった。このような危機的状況に直面したサラザール政権は、「植民地住民＝海外州のポルトガル市民」というレトリックを使う一方、暴力を用いて植民地解放運動を押さえ込むことでこの危機を逃れようとした。

このような「植民地死守」政策を受けたモザンビークでは、植民地行政府・秘密警察・ポルトガル国軍の三者が協力しあい、急速に防衛体制を整えていった。一方のモザンビーク解放運動は、複数の組織がモザンビーク領外で別個に組織され活動する状況にあった。しかし、1962年6月25日、各組織の指導者らがタンザニアで一堂に会し、統一の運動体としてモザンビーク解放戦線（FRELIMO：以下フレリモ）を結成すると事態は急展開し始める。即時・全面解放を運動の目標に掲げたフレリモが、「植民地死守」の姿勢を取り続けるポルトガルに対して、武力を用いてでも独立を獲得する道を選んだからである。

このフレリモと植民地権力の武力衝突の前線となったのが、モザンビーク北部のマクア人居住地であった。マクア人はモザンビーク中部から北部にかけて居住し、モザンビーク最大のエスニック集団となっており、どちらの陣営にとってもその協力を得ることは重要な課題となっていた。しかし、結果としてマクア人居住地が植民地権力によ

る防衛体制の中心地となったため、「フレリモ南下の防波堤としてのマクア人」あるいは「マクア人＝植民地主義の協力者」というレッテルが生み出された。

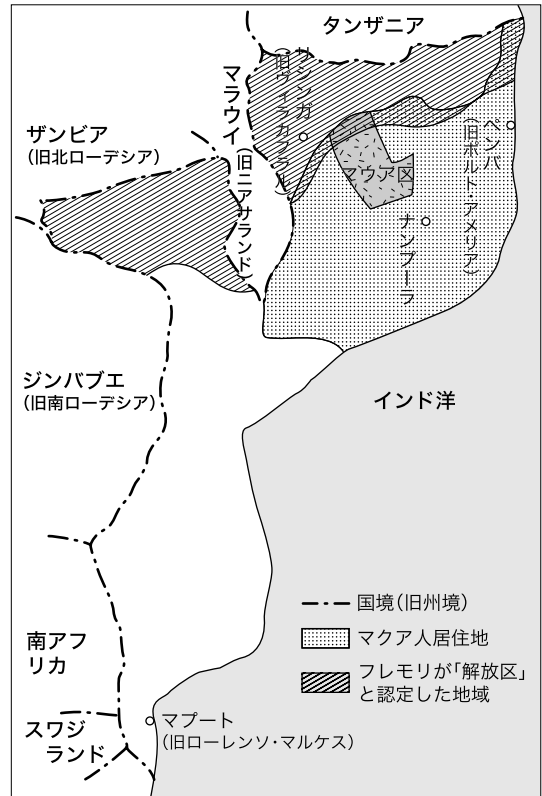
このマクア人観は、初代大統領をはじめ政府役人となった元フレリモ闘士らにも共有され、独立後のモザンビーク政治においてマクア人が不利な扱いを受ける一因ともなった。さらに現在では、このような認識に加え、「マクア人＝反フレリモ」あるいは「マクア人＝親反政府ゲリラ」というレッテルが追加され、先のマクア人観は定着したものととなっている。

しかし、植民地解放運動が、どのようなものとしてマクア人居住地の住民に経験されたのかについての研究は進んでいない。本稿では、マクア人居住地における解放闘争の実態を明らかにすることで、マクア人に関する言説を再検討できればと考える。具体的には、マクア人居住地の最北端に位置し、フレリモと植民地権力がせめぎあう最前線となったニアサ郡マウア区を事例として取り上げる。まず、解放闘争期以前のマウア区の特徴について整理する。次に、解放闘争全体の中で、マウア区を含むマクア人居住地がどのように位置づけられたのかを確認した上で、最後にマウア区における解放闘争の動態を明らかにしたい。

1 マウア区の特徴と住民の経験

「マウア区」という枠組みは、植民地権力が設定したものであり、マクア人最高首長ムアの領域（マ＋ムア＝マウア）にその語源がある。ムアとその集団はモザンビーク郡（現在のナンプーラ州）に住んでいたものの、1840年頃北上を開始し、ヤオ人と戦い勝利することで後のマウア区一帯に定着した。

マクア人居住地



(筆者作成)

マクア人は伝統的に農耕を主な生業とし、母系リネージを軸とする散居型の分権的社会を形成する。したがって、ムアは集権的な王というよりは、最高権威者であった。19世紀後半以来活発化した奴隷交易は一時的に首長の権力を強めたが、植民地軍による「平定」活動と奴隷交易の禁止によって、各首長の力は著しく弱まった。そのうえ、同じ時期、干ばつやイナゴの来襲といった自然状況の悪化も重なり、北部一帯の多くの集団が細分化し離散した。このため、1902年にマウア区に植民地軍が現れた時、ムアをはじめとするマクア人首長らは、武力抵抗することなくポルトガルの旗をたてることを受け入れるのである。

マクア人居住地となっていたモザンビーク郡は北部における植民地支配の中心地となった。しかし、植民地総督府が最南端に置かれたモザンビークでは、北部への植民地経済の浸透は遅れた。北部のさらに北方にあるニアサ郡は、内陸部に位置したこともあり、植民地権力にとっての最も辺境の地となっていた。マウア区はこのニアサ郡南部にあり、ポルトガルは、経済価値の低いマウア区を辺境のまま据え置いた。そのためマウア区の各集団は、ムアの最高権威を認めつつも、各集団が分散して自律的に暮らし、植民地支配の干渉から逃れることが可能であった。

1918年、ドイツ軍とイギリス・ポルトガル連合軍が交戦しマウア区からドイツ軍が撤退すると、同軍駐留に協力したとされたムアⅢ世が追放される。植民地権力の監視の下、ムアⅣ世が選ばれることで、マウア区における実質的な植民地支配が開始される。とはいえ、植民地権力の介入はその辺境性ゆえにきわめて限定的で、多くの集団は植民地支配の拘束から逃れようとさらに北方へと拡散していったのである。

しかし、1940年にはマウア区でもアフリカ人小農に対する綿花の強制裁培政策が導入され、このような社会の在り方は大きく変容を迫られる。第二次世界大戦勃発による世界的な一次産品の不足は、「中立国」ポルトガルに大きなチャンスを与えた。深刻な債務を抱えるポルトガルは、アフリカ植民地を一次産品の供給源に位置づけ、本国での製造業の発展に力を注いだ。なかでも、紡績業は重要な役割を占め、植民地における綿花栽培の強制は国策となる。

特に、モザンビーク北部のマクア人居住地は、その自然環境と社会構造とが綿花栽培に適していると考えられ、重点地域となった。すでに綿花のプランテーション栽培に失敗していた植民地権力

は、小農生産に注目したが、これを実現させるためには地元社会の協力が不可欠であった。植民地経済の浸透が遅れていたがゆえに存続していたマクア人の伝統的な社会形態は、これを解決するものとして期待されたのである。

マウア区を含むマクア人居住地では、各村落の首長が綿花栽培者たる住民の管理責任者として位置づけられ、植民地権力は首長らを統制することで綿花生産を確実なものとしようとした。これに対して、当初多くの集団が多様な抵抗（夜逃げ、出稼ぎ、種の廃棄）を試みるが、逆に植民地支配の強化を招き、アフリカ人警察官や現場監督が多用される契機となる。また、自由な移動が禁止されるとともに、より監視しやすい土地への強制移住政策がとられた。植民地権力による管理体制の要に位置づけられた各集団の首長は、植民地行政の末端役人としての役割を果たしていくようになる。こうして、1950年代にはマウア区の全住民が、共同体の首長を介して植民地体制に包摂されるようになった。つまり、モザンビークの解放運動組織が設立され始めるのと同じ時期に、マウア区住民は植民地支配の強い影響を受け始めたのである。

2 焦点となるマクア人の動向

この時期、農村部における植民地体制の強化はモザンビーク全土に見られたことであるが、綿花栽培の中心地に位置づけられたマクア人居住地では際立っていた。植民地支配強化の流れには、南部アフリカ地域の情勢もまた深く関係していた。世界的な非植民地化の流れに背を向け続ける南アフリカや南ローデシアの白人政権にとって、隣接するポルトガル領アフリカ植民地の独立は、自国の将来を左右しかねない意味をもっていた。したがって、これらの白人政権はモザンビークの植民

地権力に協力し、警察や軍同士の連携を深めるとともに、自国内と国境付近の警戒態勢を強化したのである。この結果、フレリモにとって、その活動をモザンビーク領内の住民に広めることは非常に難しくなった。ただし、1961年に独立を達成したタンザニアとの国境近辺だけは別であった。植民地解放運動の推進者であるタンザニアが、フレリモの誕生に寄与しただけでなく、本部および軍事拠点を提供したからである。フレリモは、安全地帯となったタンザニアを足場に、国境付近のモザンビーク住民に働きかけ、武装闘争の担い手を確保することに成功する。

同じモザンビーク北部でもより中部に近いマクア人居住地の人々は、このような動きからは取り残される結果となった。しかし、フレリモにとってモザンビーク全体に闘争を広めるためには、その活動をモザンビーク最大のエスニック集団であるマクア人の居住地に広め、彼らの協力を取りつけることが不可欠であった。

一方、植民地権力側にとっても、北部経済の中心（ナンプーラ市）と中部をその居住領域に含むマクア人の動向は非常に重要であった。このため、1964年に武装闘争が開始されて数年が経過すると、フレリモおよび植民地権力の双方にとって、マクア人の動向が焦点となったのである。なかでも、より北方に住むニアサ郡やカーボ・デルガード郡のマクア人は、双方勢力が武力衝突する最前線に位置づけられることとなり、奪い合いの対象となった。マウア区がまさにそのような最前線であった。

3 解放闘争期におけるマウア区

1960年、マウア区にもポルトガル軍が駐屯を開始する。そして、防衛や警察活動のみならず、そ

れまで放置されていた社会開発の分野（教育、保健衛生）で重要な役割を果たしていく。これは本国政府の政策、あるいは軍による心理作戦の一環として行われ、ポルトガルが存在が生活を向上させるという実感を住民に植えつけようとした。さらに、マウア駐屯の心理作戦部隊は、フレリモを「怪物」「盗賊」「殺人鬼」と宣伝し住民を怖がらせた。小集団が散居し、綿花栽培の導入によって植民地支配が集団内部にまで浸透しつつあったマウア区では、フレリモに参加することはもとより、フレリモの運動を十分理解することさえ容易ではなかった。植民地支配への武力抵抗の経験がなかったことも影響し、多くの人が「白人に勝てるはずがない」と信じていたのである。

だからといって、マウア区の住民が完全に植民地権力側に取り込まれていただけではなかった。同じ時期、マウア区北東部の地元有力者（伝統的権威、教師、役人）の一部は、さまざまなネットワーク（職場、イスラム教会、クラン）を通じて、きわめて限定的ながらタンザニアでの「モザンビーク黒人の蜂起」を知り、密かに組織化を開始していた。そして、フレリモによる武装闘争の開始から1年が経過した1965年、マウア区北端にタンザニアからゲリラ兵が到着し始めこの地元有力者の動きと結びつくと、事態は急展開し始める。フレリモの武装闘争に理解を示し協力する首長や住民が現れるのである。同区北端には秘密基地が造られ、ついに66年3月、マウア区最初の武装闘争が開始された。

対する植民地権力は、1966年から翌年にかけての乾季、対ゲリラ戦訓練を受けた部隊を多数投入し掃討作戦を開始した。並行して地元住民を徴用した諜報活動を強化し、フレリモの動きを察知するようになった。叢林に点在するフレリモの基地は一掃され、フレリモと関わりをもった地元有力

者らは一斉検挙される。そして、残りの住民は戦略村に収容された。新たに選ばれた首長は、行政長官から武器を渡され各戦略村の自警団長に任命される一方、彼らもまたスパイによって監視された。

1968年になると農村部でも諜報網の整備が進み、不審者は直ちに報告されるようになる。この頃になると、駐屯部隊が建設した小学校を卒業する若者が現れ始め、その多くが行政府や軍関係に兵士や通訳として雇用され始めた。70年に推進されたアフリカ人化政策の後押しもあり、マウア区の防衛を地元住民が担うようになったのである。

1970年までに植民地権力が優勢となったマウア区では、住民が植民地権力の意にそぐわない行動をとることはほぼ不可能となった。それでも、フレリモは南下の道を探りながらマウア区北端で活動を続けるものの、住民の自主的な協力は得られなくなり、フレリモへの食糧補給や徴兵は強制を伴うものとなった。また、戦略村で防衛にあっていたアフリカ人民兵とフレリモ・ゲリラとの間で戦闘が起きるようにさえた。

このような植民地権力とフレリモによる住民の獲得合戦は、村落共同体内に分裂と対立、ときには武力衝突をもたらし、フレリモ側と植民地側の別々の首長を持つ共同体も現れた。1974年4月に本国リスボンでクーデターが起こり、同年9月に

新政権とフレリモが和平合意に達した時、マウア区はマクア人居住地における植民地権力側の防衛体制の中心地となり、同区住民の多くが植民地勢力下に組み込まれる結果となっていた。

おわりに

マウア区の事例で詳しく見たように、住民は自ら進んで「植民地主義の協力者」となったのではなかった。マウア区住民をはじめとする多くのマクア人は、植民地権力と解放運動体が武力でぶつかる最前線に身を置き、厳しい状況下でさまざまな条件に影響されながら生きた結果、勢力が勝った植民地権力側から脱することなく独立を迎えたのである。

このようなマクア人の経験は、「解放区」となった地域の歴史的経験の重要性と栄光の前では取るに足りないものと認識され、モザンビーク解放闘争史の中で十分に取り上げられてこなかった。むしろ、解放闘争に非協力的であったとのみ記述されてきた。その結果、マクア人居住地の人々が抱え込んでいた状況の重みや主体的な抵抗の試みは明らかにされることなく、独立後のモザンビークにおいて先に紹介したマクア人言説が定着することとなったのである。

(ふなだくら一せん・さやか/津田塾大学国際関係研究所)